

2023 年度

立命館大学フォスタリングソーシャルワーク専門職講座

報告書

1. 5期生講座概要

(1)参加者の内訳

①参加者 22名（うち、職場からの派遣は6名）

②職種

- ・ソーシャルワーカー・福祉相談職 20名
- ・管理職（里親部門） 2名

③所属

- ・民間機関 17名（77%）
- ・行政機関 5名（23%）

(2) 講義内容

日時	講師	内容
7月2日	高橋恵理子氏（日本財団） 福井充氏（福岡市）	開講式 パーマネンシー保障に向けたソーシャルワーク家庭養育の推進
7月15日	渡邊守（NPO キーアセット） 当事者ゲストスピーカー	里親支援とリクルート
7月16日	上村宏樹（無憂樹） 才村眞理（元帝塚山大学） 徳永祥子（立命館大学）	里親支援におけるコーチング ライフストーリーワーク
9月10日	中村正（立命館大学） 当事者ゲストスピーカー	家族の臨床社会学
10月18日	山本真知子（大妻女子大学）	実子への支援
10月29日	団士郎（仕事場 D. A. N）	家族の理解
11月5日	藤めぐみ（レインボーフォスター）	LGBTQ と里親
1月28日	千葉晃央（京都光華女子大学）	障害の理解と支援 修了式
集中講義		
2024年8月1日～3日	ロブ・ライアン氏（Life Without Barriers）	オーストラリアにおける里親支援
		ソーシャルワークにおける非差別実践
		里親ソーシャルワークの実践

2. フォローアップ講座

2023年度は全6回の講座を行った。各回の詳細は以下の通り。個人情報の含まれる内容のため、事例検討は概要のみの掲載とする。

第1回 事例発表①

関東地方の民間里親支援機関のソーシャルワーカーの事例発表：行政機関との連携の課題について

第2回 事例発表②

九州地方の民間里親支援機関のソーシャルワーカーの事例発表：LGBTQの里子への支援について

第3回 当事者ゲストスピーカーと学ぶ会

熊本「こうのとりのゆりかご」当事者をお招きしての学習会：

赤ちゃんポストといわれる「こうのとりのゆりかご」に初めて預けられた当事者の男性（20歳）をお招きして、ライフストーリーを語っていただいた。特に、生みの母のを知ることや里親から養子縁組に進む過程について詳細に知ることによって子どもの移行期をどのように支えるべきか支援職の役割を学ぶことができた。

第4回 事例発表③

関東地方の民間里親機関のソーシャルワーカーの事例発表：親族里親との連携における葛藤について

第5回 事例発表④

北陸地方の民間里親機関のソーシャルワーカーの事例発表：特別養子縁組と里親委託の選択について

第6回 最終回

中村正教授の講義と1年間の振り返り

担当者所感

今年度は、年間を通して延べ97名の参加が得られた。1期生から4期生の修了生がそれぞれの地域・機関における困難さを抱える事例を持ち寄り、安心して相談できる場を提供することができた。さらに、支援者同士の情報交換の場にもなっており、実際に、ある地域ではフォローアップ講座を通じて検討をした結果、実務で連携を取ることができた。

本講座の修了生が持ち込む事例は2つの家族を同時に示唆にいかして考える必要があるという点が通常の家族理解の枠を超えているといえる。そのため、ジェノグラムに書き込む家族関係だけでなく、エコマップを用いた地域資源やサポートネットワークを含めた支援プランを考える必要がある。

次年度以降は、すでに事例を発表した参加者が再度事例を発表したいというニーズもあるためすでに発表した事例のフォロー体制を検討する必要がある。

受講生から寄せられた感想からも分かるように、定期的・継続的にこのような場を設けることで事例の検討だけでなく、全国のフォスターリングソーシャルワーカーのネットワーク構築という成果をめざしていきたい。

3. オーストラリア視察

Ritsumeikan Academics and Student – Study Tour – Brisbane, Australia

【DAY 1】

- Life Without Barriers – オーストラリア最大の民間里親支援機関
- Key Assets – 民間里親支援機関

【DAY 2】

- Kulwin Aboriginal Corporation – アボリジニの家族に特化した里親支援機関
- Immersion Activity – バーレイヘッズ地域でのアボリジニ文化体験

【DAY 3】

- Create Foundation – 社会的養育経験者の当事者団体
- Social Care Solutions – アセスメント特化型民間機関
- Department of Child Safety – クイーンズランド州児童相談所

各視察先の内容は以下の通り。

(1) Life Without Barriers

○親のニーズに応じて以下の4つのプログラムから支援を提供する（最大12か月）

①プレッシャーを感じている保護者 ～家族がどう包括的にサポートされるか 子どもの養育に関して影響を与える要素を考える。

②セキュリティサークル

家族と一緒に作業し、保護者が子どもにアタッチメントを構築できるようにする。

視覚的なアタッチメントマップを作って、親が子どもの精神的世界を理解できるようにする。

③家庭内暴力モデル（セーフアンドトゥギャザーモデル）

家庭内暴力の被害者になっている親のサポートを提供する。目的は、加害者の行動パターンを特定することで、加害者に説明責任を意識させる。

④女性のためのDVサポートグループ

8週間のプログラムを提供する。家庭内暴力への知識を女性に持ってもらい、チームで自信や自尊心を与えられるような場を提供する。

子への支援となっている。

以下の4原則をもとに実践をしている；

② 文化的能力

②トラウマインフォームドな実践

③ 家族中心の実践

④ セルフレギュレーション →一番探索していかなければならないエリアである。ソーシャルワーカーが里親と子どもと協働しながら、子どもが行動を調整する方法を一緒に見いだしていく。

(3) Kulwin Aboriginal Corporation

アボリジニ及びトレス諸島民の子どもは子ども人口のわずか3%にも関わらず、児童保護システムにおける割合は50%に上る。歴史的に、先住民家族は Stolen Generation 時代の政策から影響を受け、社会制度に恐怖心を持っている。なぜなら、先住民ではない白人が家族から子どもを引き離し、分断し、教育や養育から子どもを引き離した歴史があったためである。

Kulwin Corporation の目標は、先住民の養育や文化のあり方、プロトコルをシステムに理解させることである。児童保護省が家族にいる子どもがリスクにあるのか、また家族から引き離すかの決断をするという手法は、西洋的なものである。親から引き離される前に、児童保護制度に対して、文化的養育に関するアドバイスをする必要がある。例えば、先住民の文化的養育制度の一環としてキンシップシステム（親族内での子育て）という文かがある。キンシップシステムでは、母父だけが養育をするのではなく、叔母が子どもの母親という形で認識されることがある。このような、先住民ではない児童保護制度の誤解を解消していく必要がある。家族システム全体の中で関係性を構築していくという子育ての方法につちえ理解を促したい。

まず重要なのは、子育ての方法についての違いを認識することである。親族による養育システムの一環として、祖父母叔父叔母、拡大家族をサポートするという視点が必要である。家族の中に存在する「セーフパーソン」と話し、子どもに関する決断をする上で、家族に決定の機会を与える必要がある。Kulwin Corporation のスタッフは、家族のメンバーのことを理解しながら、子どもが誰と親しくしているのか、どこで生活すべきかを家族と話し合うようにしている。

(4) Create Foundation

社会的養護の子ども・若者の声を代弁する国のピークボディである。

ビジョンは、社会的養護を経験した全ての若者の能力を最大限に発揮させること。全州及び準州にオフィスがある。豪州全体で社会的養育の子どもは45,400人いるが、3人に1人が兄弟と離れ離れになっており、37%が何らかの司法制度に係属、42%が先住民の子どもである。このような現状を改善するために若者をつなげてコミュニティを作ることを目指している。

Create は、1992年に設立された団体である。英国の Who care project などの動向もあり、NSW のコミュニティ省や他の省と協力して行ったキャンプを通して子どもたちが一堂に会し、自分たちの経験を

話す機会が与えられたことがきっかけとなる。1993年5月にNSW州のネットワークが資金を受け取り、社会的養護の子どもたちに使うことに決めた。その後、1993年8月に、創設者ジェーン・オーエンによって若者グループが作られた。社会的養護を受ける若者の協会と呼ばれていたが、資金は大変少額だったため、車庫で組織を作るところから始めた。1993年9月 デイビッド・ヒルが豪州のスポンサーとなり、1999年ブリスベンにて集会が行われ、非営利団体クリエイトが作られた。名前は子どもたちが決めた。

以下が主な活動内容；

- ・ Club CREATE

同じ経験を持つ子ども若者とつながることができるイベントを行っている。さらに、四半期ごとに2つの冊子を発行。1つが12歳以上、もう1つが12歳以上を対象としている。この冊子を作るために、若者が委員会を結成している。

- ・ Connection events

0～25歳クラブクリエイトのメンバーとその家族を対象にイベントを行う。

- ・ 経験者の声：「クリエイトは私を変えてくれた。それによって私も人を変えることができている」

- ・ Speak Up：主に、14～25歳の若者が自分の「生きた経験」について話す活動。大勢の前で話をするトレーニング。情報を提供し、自分の声を発するように、声を聞いてもらえるようにする。

- ・ Youth Advisory Groups：社会的養護でどのような経験をしたのか話をする事で政府レベルの政策決定に声を届ける活動

- ・ Create your future：生活スキルを得られるようにするプログラム

- ・ 全国カンファレンス：2年に1度開催。若者や里親、児童福祉業界で働く支援者が集まって社会的養護を改善するように議論する場である。

2023年のクラブクリエイトメンバーの内、36%が先住民であると自認、85%がCreateに来てつながりを持てるようになった、80%がクリエイトのおかげで所属感を持てるようになった（居場所がある）と述べている。

なお、経験者1名から経験をお聞きし非常に深い学びを得たが、ここでは個人情報のため割愛する。

(5) Social Care Solutions

アセスメントに特化した民間機関であり、現在オーストラリアとニュージーランドで支援を展開している。

アセスメントを行う際のクライアントは常に子どもであり、包括的かつ透明性をもって行うというのが理念である。アセスメントのフォーマットを里親希望者に開示し、どのような点を明らかにしていくのか透明性をもって聞いていく。どこの組織にも属していない機関が行うため、先入観がない客観的視

点で見られることや多くの里親を認定しなくてはならないという政府や民間里親機関が抱えているプレッシャーがないため、より正確なアセスメントを行うことができる。

具体的には、生態学的システム理論を採用しており、フォーマットにチェックすれば終了とするのではなく、全体の枠組みを重視したアセスメントを行っている。

集めた情報を分析する際には、「クリティカル・アナリシス」の手法を取り入れており、具体的には以下の流れで行う。

① What ②So what ③now what

① データ:何を知っていて、それはどこで得た情報なのか？

例えば、家庭訪問をする際に健康的なおやつやライフを提供しているか、アウトドアアクティビティを楽しんでいるかなどを見る。

② 得られた情報は真の意味で事実であるか確認をする：

得られた情報から何が得られるのか、それにどんな意味があるのかをエビデンスとして示していく。最初の情報からえられたものをバックアップするために具体的なエビデンスを取っていく。

例えば、里親候補者が「サッカーの指導が好き」と述べた時には、家庭訪問の際に実子がボールを蹴っているかチェックしたり、サッカーチームを訪れて子どもたちにインタビューをして、コーチとしてどうかインタビューする。聞く、見る、知る、という3点を重視する。

③ 情報が里親の資質としてどのような意味をもつのか分析する：

里親希望者の人物像が明らかになった後には、その人が里親になった時にそれがどのような意味を持つのか分析していく。

(6) 児童保護省 (Department of Child Safety)

クイーンズランド州において、法律で定められている児童保護機関（日本の児童相談所）。政府が制定した枠組みを基に児童保護サービスが提供されている。しかし、法廷児童保護部門はコミュニティからよく思われていないことが多く、家庭訪問すると怖がられることが多い。他の州と異なり、クイーンズランド州では、ケースマネジメントや決断、法廷関係は児童保護省で行われている。里親支援は民間の里親支援機関に任せている。

クイーンズランド州では、先住民は人口の3%だが社会的養護の子どものうちの50%を占めている。先住民の文化では、刑務所や社会的養育という概念はなく、親族やコミュニティの中で子育てをすることになっている。これまでの歴史を受けて、トラウマを抱えて苦しんでいるのはつらい現状である。

子どもにとって最良の場所は家庭であると考えており、子どもが中心となり、家族と過ごせるように支援を行う。さらにそれが難しい場合は親族の中で育つことができるように模索する。そのために最初に行うことは、家族のサポートである。子どもたちに影響を与えるようなものを特定しながら、可能な限り自発的な形で子どもをサポートできるようにしていく。さらに、意思決定の際に家族に支援を提供することが重要である。

児童保護省が大きな権限とパワーを持っていることを理解しており、家族の意見が考慮されなかった場合に大きな損害を家族に与えることを自覚して業務に当たっている。特に、クイーンズランド州では児童保護省は侵略的な権限を持っている。いくつかの側面では、警察より力があるといえる。

子どもによっては家庭で暮らせないこともあるが、その決断の前にやれることは全て挑戦し、子ども家族と分離された後でも家族とつながりを持ち続け、自分の家族は誰とどこにいるのかを知ることは重要である。特に、クイーンズランド州法では、先住民族の子どもは特に原家族と良く協働するように書かれており、子どもにも家族のつながりや文化を伝えていかなければならない。

児童保護省では、職員のケアは24hサポートラインを設置して、メンタルヘルスを重視している。一番重視すべきは人間関係であり、職種ではなく誰に対しても一人の人間として理解するようにしている。

4. 人間科学研究所総会におけるシンポジウム

○シンポジウム「子ども家庭支援のネクストステージ」

○日時 2024年3月2日(土) 11:00～

○場所 立命館大学衣笠キャンパス

○登壇者

中村正(立命館大学 社会産業学部・人間科学研究科 教授)

中谷孝至(小規模居住型児童養育事業 ファミリーホーム咲く)

中谷浩子(同上)

久保樹里(日本福祉大学社会福祉学部 准教授)

渡邊守(NPO 法人ケアセット代表)

徳永祥子(立命館大学衣笠総合研究機構 准教授)

○内容

5年に渡る本講座の内容を受けて、今後、地域で子どもを育てるために必要な視点や支援について議論された。

第1部では、ファミリーホームでの実践から養育の場での実情や苦悩を発表いただき、中村教授との対談からさらに詳細な状況が明らかにされた。

第2部では、久保准教授より日本における「ラップアラウンド」の取り組みが発表された。「ラップアラウンド」は、従来型の支援と異なり、当事者である子ども・家族を中心にチームを組み、次に渡邊代表より、既存の里親制度を字度もが実家庭にいる間にショートステイとして活用することで親子分離を防止できることなどの利点が発表された。

最後に徳永よりライフストーリーワークがさらに日本の社会養育において実家庭や支援者への実践を視野に入れることで子ども・家族理解の一助になることが提案された。

なお、詳細は人間科学研究所発行にて公開予定。

5. 受講生の感想

① 講座では、違う分野・機関の専門職とフォスタリング支援について知れたことが良かった。立場が違うと同じ里親支援をしていても意見が異なることはあるのだと理解できた。

子どもを守ろうという理念は共通なので、立場の違いがあっても同じ思いはあるという視野が広がった。

子どものニーズによって、様々な支援を提供する必要があった。また、障害児への視野、ライフストーリーワーク、コーチングなど支援を選択する時の幅が広がった。

現場にいると「方針」を決めなくてはならないことが多いが、自分の所属組織だけだと選択肢が固定化されるが、講座の参加者や講師の話聞いて、他の選択肢や方針があるということを知れた。

視察は、家族担当の児童相談所と子どもを担当するソーシャルワーカーが複数いることを学ぶことができたので、帰国後にも似たような役割分担をしている。実子への支援はこれまで組織内や里親自身と支援の必要性が十分周知されていなかったが、講座で当事者の話から学ぶことができたので、堂々と実子支援ができるようになった。

職場内に本講座の修了生が複数人いるため、講座で学んだ共通言語が増えたために仕事がしやすくなったと感じている。

修了後も、様々な会議等で修了生にお会いすることが多く、心強い。

オンラインにも良さがあり、対面では会えない参加者もいたと思うが、今後もオンラインや対面で集まる機会があると嬉しい。

② 【講座】

- ・職場や立場が違う受講生がグループごとに話し合いができたことが良かった。
- ・FSW というまだ知られていない領域で、仲間が全国にいることが分かり、心強く感じた。
- ・養育里親制度促進するために、里親がリスペクトされる社会になるよう、自分に何ができるかを考え続け、目の前の里親子に支援をしていきたい。
- ・多方面の専門的な講師の先生、ゲストスピーカーの方にお出合いでき、上記の気づきや FSW に必要な視点を学んだ。更に講師の先生の HP や取組みを知ることができ、更に学びを深めるきっかけとなった。今後も新しい考え方に更新できるよう、情報を取入れる場を探し継続して学んでいきたい。FSW の出合いの場を、何らかの形で継続してもらえるとありがたい。

【オーストラリア視察】

- ・先生方と共に研修に参加できることが、先生方視点での質問の場にも立ち会え、私たち現場にいるものには、とても貴重で有意義な時間でした。
- ・事務局の方の同行があり、自由時間も満喫でき、ON・OFF 贅沢な研修となりました。
- ・遠方への視察も行かせて頂きました。移動の交通費を日本財団が支援してくださりありがたかったです。渡航費用でも大金でしたので、交通費も ON だと、参加を断念したかもしれません。
- ・コロナが5類になり制限もなく渡航でき、5期生のメンバーにも恵まれ、充実した研修でした。

③ 【講座】 他の機関のソーシャルワーカーとの情報交換が有意義であった。

- ・すこし分野が違う講師陣の講義をきくことで新たな視野が得られた。
- ・グループワークでは実際に自分の家庭を里親委託に置き換えることで、子どもがおかれた状況がいかに過酷か知ることができた。
- ・講師も受講生もとてもポジティブな明るい雰囲気だったため、自分の地域の里親支援はまだまだだと暗い気持ちになることもあったが前向きに考えられるようになった。
- ・講座で学んだライフストーリーワークなどの新しいスキルもとりあえず挑戦してみようと考えられるようになり、実際に現場で開始することができた。

【オーストラリア視察】

・オーストラリアは全く別物で、進んでいると考えていたが、どこの国も悩みがあることが分かり、自分も頑張ろうと思えた。

・国は違っても子育てや夫婦関係は同じ悩みを抱えており、以下に社会が支援するかが大切だと学べた。オーストラリアは、実家庭への支援が充実しているように感じたので、これから日本もその方向で進んでいくのかもしれないと感じた。

・オーストラリアの施設は小規模だが短期入所が主であり、日本の施設は0歳から18歳まで過ごせるのに対して、里親委託は措置変更が多いことが特徴だと感じた。

・CREATEの当事者がくれた「支援者もできるだけHAPPYでいてほしい」と言っていたメッセージが印象的だった。自分が不満ばかりの状況では人のケアはできないので、自分のケアもしようと思えるようになった。